

所報

INSTITUTE OF BUSINESS RESEARCH
COLLEGE OF ECONOMICS
NIHON UNIVERSITY

No. 69

展望

東日本大震災は、日本の経済や企業だけではなく、多くの日本人のこれまでの「生活」に自省を迫るものだったといえる。そのような歴史的時期に、3人の方々に講演をいただき、さまざまな角度から、「大震災以後」を意識してお話をいただいた。その講演録が今回の所報の内容である。

最初は、前田工織株式会社代表取締役社長・前田征利氏である。前田氏は現実的な経営活動を踏まえ、一東日本大震災にわが社はどうかかわったか—のサブタイトルで講演をしていただいた。特に前田工織株式会社は大正19年に繊維加工技術を軸にして起業され、今日では土木技術や樹脂形成技術へと発展した企業である。それはまさに、戦前、戦後、さらには今日までの日本企業の「生きた歴史」といべき企業といえよう。その企業家が東日本大震災を語る視点はまさに傾聴に値する。そこでは、日本企業の「力強さ」を目の当たりにする。

二人目の中沢浩志氏は現在 SMBC 日興証券株式会社の金融市場本部長補佐であり、金融経済の最前線で仕事をされている方である。講演も「結局、何が為替相場を動かすのか」と興味深いタイトルである。もちろん、大震災以後の日本経済を意識しての講演である。中沢氏の講演で何よりも感じるのは、「株相場」がまさに「グローバル」な動きの中で変動していることが、ひしひしと感じられる。なかでも、中沢氏が世界経済や政治的な動きを幅広く捉えた上で、戦後から続いた体制が、今現在は「転換期」を迎えているという指摘は注目に値しよう。やはり、為替相場の現場にいる人の体験からの分析だといえよう。

三人目は、東日本大震災の被害を直接的に受けた永澤裕二氏の講演である。永澤氏は福島空港ビル株式会社代表取締役副社長という要職を担われている。その永澤氏の語る福島空港をはじめとする福島県の震災被害は生々しい。その講演の中で永澤氏が「……今まで福島県を知らなかった方も『福島原発』で福島を知ったかもしれません。しかし、あれは『福島第1原子力発電所』ではありません。正しくは『東京電力福島第1原子力発電所』です」という言葉は重い。いやでもかって広瀬隆氏が『東京に原発を！』という著書で原発問題をすどく批判したことを思い出さざるを得ない。

以上のような貴重な講演が時宜を得て聞くことができたことは貴重だろう。あらためて3人の講演者になによりも感謝申し上げます。やはり、我々は真摯に考えるべきことを3人から突き付けられたといえる。永澤氏が講演のなかで述べられたように3・11以後日本の価値観が変わったといえるであろう。しかし、次なる「価値観」がいまだに、はっきりと見えない状況が続いている。

(産業経営研究所 江上 哲)